

きょう・きょう・あす

細井俊明

(法然寺住職
竜雲学園長)

どうしてこうも福祉の言葉には不消化な言語が多いのだろう。わが業界誌である「愛語」(全国の精神薄弱児者施設が寄って作っている愛護協会の月刊誌)を繙いてみると、片假名と漢字が目白押に並んでいる。末成熟の社会や学問はやたらとむつかしい事を云わねば権威が高まらないのか実に読んでいて阿呆らしい。インテグレイション、ノーマライゼーション、スーパーバイズ、コミュニケーションガニゼーション、ニード、係り、主体性、ざっと拾ってもまだまだ出てくる。これらの文言を同業者や学園の職員以外に使って分ってくれるのだろうか。園児、園生や、親の人達に分らない言葉を盛んに使って職員だけが悦に入っている。もう少し範囲を広げて、学園の存在によって利害が生じる、

学園の隣り近所、廻りに住んでいる人達、即ちこれをお目当の地域と云うなら、地域のおっさんおばさんにこれらの福祉語が通じるだろうか。学園が孤立したり、周囲の住民とトラヴルの起るのも学園即ち園長を始めとする職員に原因があるように思う。学園とは何をするところで、知恵遅れとは何かとか外見だけで詳しい説明はなされない。もっとも詳しく知ればもっと排除されるだろうが。

要するに職員が他所者なので、又、民間施設は経済的理由で、たゞでさえ閉鎖性の強い山間部の村落へ作るようになるから、地域からの排除もすさまじい。清水基金は補助金を下さる場合に現地調査をされるが、交通の便の悪い所が多いので辟易されるという。我が香川県も養護学校や精

薄施設が出来るとなると周囲の住民から猛烈な反対がおこる。新聞や報道では住民の無理解や差別意識と報道されることが果してそうだろうか。施設や学校側に多分の甘えがあって、それが根になって地域からの否定になっているのではないか。私もご多分に漏れず地域から、こっそり油を絞られたり、逆に迷惑を掛けられている。私の園長をしている大人の更生施設竜雲少年農場では私は地域への加害者であり、自坊の法然寺では子供の施設の竜雲学園の被害者だ。

香川県高松市及びその南部の山間地にある施設の二十年ないし十年の歴史を顧みて私の「地域福祉論」（雑感）を展開していこう。

竜雲学園とは私の住職をする仏生山法然寺の境内に昭和四十年四月に定員四十名で発足した精神薄弱児の収容施設である。仏生山とは文字通り仏、生れたもうた山で法然寺の中心部をなしている。これが町名になり高松の南部にあり、三百十七年前、松平頼重（水戸頼房の長男）が、この地に法然上人ご配流の遺跡として菩提寺を営み今日に至っている。

敷地は当初は六万余坪あったが今では二万坪ほどになり、

五十米高の山頂に松平歴代の墓、約六百墓がある。山腹から中腹にかけて仏生山町近辺の人達の墓が殆どこゝにあり、墓地は寺の管理下にありながら、自由墓地のようになっている。距離的に町の人々の住居と離れているため、施設を創るときも直接には反対は出なかったが、墓参の際気持が悪いとか、寺が焼かれないかとかお決りの苦言は相当あった。仏生山小学校は寺に隣接しており、グラウンドも併用させてもらうことになり身近の地区が小学校校区であり、やゝ大きい目の地区が竜雲中学校の校区であった。地域の人達以上に迷惑があったのが小学校や中学校であり、学校に設けられた特殊学級や学園内分校の派遣教師で、設備の整わぬ学園に來た先生も大変だったろうが、その要求に一々応じさせられた私達はそれだけで相当な疲れを背負い込んだ。二十年前の昭和四十年頃は香川県の中学生、小学生の学力が当時の全国の学力テストでは常に一位、二位にあり、たまに二位、三位になった刻などは猛烈に生徒にハッパが掛り、朝、夕の課外授業があったりした。

昭和三十九年私は京都の三十年に及ぶ生活を切り上げ父母出生の地の仏生山法然寺へ還ってきたが、広い寺のこと

故、里子が三人居たが、その一人の学籍を付けに学校へ行つたところが、今、受け入れたのでは県の平均学力が下る、文部省の全国学力テストが済んでからにしてくれと云われ啞然としたのを思い出す。

他にも、雪の朝、境内の墓地を諸堂巡拝の私の姿を視て逃げ出す親子を追ってみたところが、精神薄弱児を連れた父親は手に線香の束とガリ版刷りの紙束を持ち、東向いて三度拝み線香十本供え、西向いて拝んで線香三本供え三度拝めと、そのようなことが刷られていた。二人が手を合せて私に許しを乞っていた。

その頃私の父は保護司をしていたが、五人観察中の四人迄、ボーダーライン以下の痴愚、魯鈍クラスの少年達で、勉強勉強の学校に居られる筈もなく教室を逃げ出して、こそこそ悪さをしたり、知恵の働く親分の命令で悪事を働き罪だけ背負わされた子供達だった。

これは学園発足後五年間程続いた事だが、特殊学級在學生は学期末には全員一ばかりだった。私には知恵遅れの子供達に一の評価しか出来ない担任や校長こそ一の評価しか出来ない人々だった。たまたま校長が学園に来て良いこと

や優しいことを云うときは、決してその一週間後ぐらいには転校したり退職していった。

この教師の系譜や体質が二十五年後まで続き、昨夏マスコミによって全国へ喧伝された善通寺養護学校の教師である。

数年間、出席印だけ押して、日がな一日中自動車の中に立てこもっていた人である。この人も問題行動をおこすまでは普通高校に居たが不適応を起して養護学校へ廻された。

これらが二十年前の仏生山に精神薄弱児の施設を肝要とした要因の一部であり環境であった。

不慣れた職員、一夜に一人が三回も四回も夜尿する、ほとんどが重度の障害をもった園児、当時から職員はそれはそれは大変な毎日だった。しかしそれは精神薄弱児施設の園児に付きもの、一二年間の混乱であったが入園した園児達は、もっと大変だっただろう。慣れぬ建物や職員、今迄親許を離れたことのない子供達、年令は八才から十五才でも実際は一―二才の智恵の持ち主たち。

それが急に集団で一ヶ所に集められ朝から晩まで時間通りに生活する。家へ帰りがるのも今にして想えば当然だと思う。しかし一晩に二人も三人も無断外出され、春や夏

は捜しよいが秋や冬は肝を冷したものだ。

手薄な職員を助けて風呂入れに始まり夜尿起し、園児の体育等、何から何までやってくれたのが法然寺にある高松第十二団のボーイスカウトだった。

私が父から命ぜられて隊長を継いだときはボーイスカウトがこの地に設立されて十余年経ち隊員もごくわずかに減っていたが、学園をスカウトハウスにし、登校時以外は誰かが隊にいるようになった。この中から竜雲学園の将来を背負う職員が次々と生れてきて二十年後の今日は、中堅職員であり幹部職員となっている。前述のように厳しい学校環境だったがその中でよく学びよく奉仕しよく遊んで学園の成長発展と共にボーイスカウトもグングン大きく力強くなっていった。人数が増えただけでなくその活動が活発になっていった。ボーイスカウトでは学園の体育室を使って剣道の練習やラグビーチームの活動、野球はもちろん。

お手のもののキャンプに瀬戸内海の豊島へ開園の翌年、昭和四十一年夏には学園児との合同キャンプを張ることになった。ボーイスカウトの年長隊員の高校生は週二回、夜間に学園に集まり園児のお休み手伝いをしたのち、アメリカ

カのスカウトハンドブックをゼミ方式で輪読したり、学園に不足のものがあると米を作ったり花を作ったり色々な仕事をしてお金で買ったものが随分ある。スカウトの親達も内心は心配しただろうが全面的に信頼してくれた。狭い町は親類が多い。スカウトの家族が中心になって周辺に強固な学園の支持母体が出来ていった。先にも記したが開園の翌年には豊島のキャンプ、学園児の親の会の「うしお会」の総成、第一回ボーイスカウトとの合同運動会、仏生山婦人会の奉仕活動の活潑化等、園を中心とした活動が盛んになった。

地域社会との交流は盛んになったが絶えず気を配ったことは学園と対当の相手としての連合であり連携であった。

昭和四十二年から四十三年に亘って学園の後援会の設立が急速に高まり結成を視たが、主力になる人に不純な行動があり、恩着せの姿勢があったので後援会は一年で意識的に解消させてしまった。学園内分校の教師や本校の校長の恩着せは聞き流しと有難うございますの反復で済むが、学園は対象児が弱い人達だけにこちらに主導権と行為をチェックする腹がまえがないと危険だ。これは職員の行為や親

の会の活動についても同じことが云える。後援会は機未だ熱せずだが、二十年後の今、昭和六十年の春、会長は旧藩主のご長男松平頼武氏にご就任いたゞき宗門の方々や仏教大学の諸先生のお力ぞえも頂いている。この稿を借りお礼を申し上げる。同一宗派も地域と考えていゝのではないだろうか。更に環をひろげて確かな理解の得られる相手なら、色々な共通項のある人達に会員にに応じていただき、地域を全国に拡げ支援をお願いしていると云えばオーバーだが現実には北海道の果、知床でも竜雲への熱心な後援が行なわれている。先にとぶが近時は施設への入園者も変り、司法福祉的な傾向と精神障害的傾向（家庭内暴力、会社、仕事拒否等）など社会の縮図が一施設の中にも現られ乳牛の放牧や大自然相手の作業でどんどん治育されていく。それに応ずるために北海道の知床半島の付け根に分場を拵えこゝで誰れに遠慮なく牛を飼うことにした。ご存知の様に知床は厳寒の地である。幸なことに千島火山帯の南限に位置し近くで温泉が湧出している。広大な学園の敷地内に泉源を掘り当てることを後援会の眼目をお願いしたい。措置費や共同募金の恩恵を多分に受けている竜雲学園は、将来多く

の苦難な生を受けた人々を立ち直らせ又安住の地とするため、直経3インチのパイプを知床の土深く打ち込み、温泉を掘り当てる、この一点に力を寄せていたゞくことを願っている。向うで面白い話がある。町や公共が掘ると水しか湧かないが個人が必死の思いで掘るとよく湯が湧くという一生懸命の大事を教えらるる気がする。これも機が熟せば成功しよう。大きな目、永い目で視て推めてゆきたい。

さて竜雲学園は仏生山法然寺のお陰で学園の園児は相変らずの日常ながら周囲の人々に守られ、特に無断で行方分らぬとき、又留守の家へ入り込んだり店のものを持ち出したりと色々あったが、土地柄から非常に寛大だった。しかしそれに甘えることなく掛けた迷惑にはいちいちお断りに廻った。その誠意が次なる好結果を生むようだ。それも仏生山という深い古い法然寺の地盤があつてのこと、思い知らされることが後々起ってくる。

昭和五十年になると竜雲学園も創立十年、満十八才を超える園児がどんどん出てきたが訓練の成果が実ったというものゝ就職や家庭へ帰るのも困難という園児がほとんどだった。

その頃達した結論は自然を相手の職場や訓練の場を作り、
重度の人は訓練職種を生かした職場へか、又は学園でその
ような職場を用意しようと親や学園職員が集まって農業法
人を作り仏生山の学園から二〇キロほど南へ入った山間部
に約三〇キロヘクタールの山地を求め山地酪農方式（二四
時間、三六五日放牧）による乳牛の放牧を生活の場とする
施設を造りにかゝった。香川県は兵庫県に次いで全国で二
番目に溜池の多いところだが、小さな池の上流で牛を沢山
飼うというところから池係から猛烈な反対を食った。その
交渉に一年間、主に夜だったが、地域の集会へ行つてはお
願ひの連続だった。そのとき、地域の一部の人の言つたこ
とは、学園の親の人達や吾々には決して忘れられない言葉
だった。

たった二〇分、南の山岳部へ入ったゞけで、これだけ云
われるということは、今迄の仏生山の地域での日常が如何
に甘やかされていたかゞしかりと腹にこたえた。その地
域は過疎の十戸に満たぬ家々でそのうち反発の強いのはほ
んの二―三軒である。色々なことをこの十年やってきたが
基本的には地域との間は何の解決も出来ていない。二―三

の例を上げると地元から職員の採用をしたが、年令の高い
人や或る種のことしか出来ぬ人、ゼネラリストと呼ぶ必要
するに裸の王様である。看護婦、栄養士、教員、建築士、
整備士等々と比べてしっかりと資格事項のない施設長や
職員は私も含めて裸の王様にならぬよう自戒しているが、
その辺りからも職員同士の呼びあいに、又、園生からの呼
びかけに「先生」という呼号は竜雲少年農場では使ってい
ない。又地域の人で、その人は職に就けたが施設へ採用し
なかった人は逆にその人やその人の家族の反発を買う。学
園で講入する諸物品についても同じことが云える。結極地
域が学園へ笑顔を向けるのはマイクロバスの利用、２トン
ダンプの利用、地域の雑役、こんなところである。年に二
度ある地域の神社の祭のときは昔の人身御供ではないが私
の厄日である。学園からお供した酒を足腰立たぬ飲まさ
れて絡まれてやつと解放である。この先いつ迄続くことや
ら。しかし現実にはやはり古いものが被害者で新しい者が加
害者である。仏生山では法然寺三百年の歴史が被害者で隣
接の小学校や竜雲学園は加害者である。小学校は寺の下の
グラウンドへ移転して十年、自校のグラウンドを守るため寺の

境内は学校用駐車場である。小学校の校歌にある「来迎院の鐘の音にいざや学ばん……」（法善寺の院号は来迎院）とあるが小学校のときを告げる鐘の音は全国ありきたりの「ウエストミンスターアベイのビック・ベン」である。

さて竜雲学園の法善寺に対してのこゝ二〇年の間小さな加害は数限りなくあるが、主なものだけでも小火二回、重要文化財級の鐘楼の欄干をのこぎりで一メートルほどすっぽり落された。しかし綾上の竜雲少年農場が出来て週一回マイクロバスで降りて来て境内掃除に力を尽してくれ、又昭和十二年に仏生山法然寺の境内に造った通所授産施設のかしのき園（こゝは生花の栽培を職種にしている）の園生が、毎週五十ヶ所はある仏前に生花を供えてくれるに及んで寺の被害者の立場は薄れている。

竜雲少年農場の方は十年も経つと地域の池の汚れは深刻である。上流に百人からの吾々が住み、生活水の排水は浄化装置を通しているがやはり下流へ迷惑を掛ける。水洗便所の浄化槽の汚水は山へ揚げて芝生の牧野へ肥料としてまく。乳牛は十頭放牧中であるがそれらも含めて年々下流の汚染は拡っている。洗濯水の量など百人分となると膨大な

量である。設立後二年間は園内を流れる谷川の水を浄化して飲んでいたが汚れが進むにつれて、やっとの思いで井戸を掘り当てた。それも五、六年で水質が落ちてきた。

今年飲料水だけは町の上水を引き込んでもらった。敷地の広さからか園内に楽しみが多いこと、例えば春のわらび採り、池や小川の魚釣り、これへ町から家族が遊びに来る、又、乳牛の飼料作物や野菜の栽培を地域の田圃を借りてやっている。これは休耕田で米作を休み牧草や畑作を学園でやっているため、転換作物の奨励金が田圃の持ち主に入り学園も飼料や野菜が採れて喜ぶ。これが一番地域と上手く行っている関係だと思う。一挙両得というところである。

この作業に園生が田圃へ出て行って地域に交るのは苦情は出ない。はじめは気持ち悪くとも、毎日毎日話したり見ているうちに交りもやや濃くなってくる。暑い中、寒い中ご苦労さんといったにないが食べるものを呉れる。

そして仲よくなっていくのは美談であって現実はその逆である。少しでも園生、とりわけ見掛の悪い人、可愛くない人がそこから先、親しくしたりトイレを借ることは拒絶されている。その辺の呼吸は随分とむづかしいし、現場の

職員を最も悩ますところである。しかしこうした関係から園生の無断外出は減ったし、すぐ通報してくれるが最近の悪役は牛や羊や犬である。

仏生山の法然寺は犬猫捨場で有名であるがそれを園生が大事に竜雲少年農場へ持って帰って育てる。そんなところから近辺の野良犬は学園の責任となる。又十一月頃は牧野の芝草も枯れて牛や羊は餌に困って棚を破って、路肩や畔道へ出ていく。ご承知と思うが通路端はオヒシバ、メヒシバ、キンエノコロら野草ながら牛の大好物の宝庫である。又、牛や羊は字の通り群れをなす。一列に並んで大人しく餌を喰べる。車のライトに牛群や、羊群や、羊群をみたドライバーは、親切な人は学園へ知らせしてくれるが警察へ通報する人もいる。冬の夜中の牛追いは宿直者泣かせである。色々な矛盾を含みながら施設は周囲と同化し又、斗い争い仲良くしてその使命を果しながら歳月を送ってゆくが、施設の近くの住人で絶対施設と打ち溶けぬし無視する人々がいる。知恵遅れを抱えられた地域の家族の人達である。そのご苦労は分るし大変なことも分るが初めの頃は力になってあげたい、家族の催しに参加してくれ、ばとおもい働き

かけたがそれは相手に苦痛を与えていることだと控えるようになった。その人達も居住地域と離れたところでは伸び伸びと親の会に参加しておられるのだろう。学園の親の会の人達がそうであるように。

障害者の問題を語れと云われる機会が多いが身心障害者と身体障害者の置かれた立場についてまず自覚の問題からあげると前者の場合、竜雲少年農場の入所者七十名の内、自分が何故この学園に入所しているのか自覚している人は二名である。又、本人同志の積極的な型での結婚が行なわれない。この辺りで区分けをし、対処せねば処遇の面で知恵遅れの人達がどんどん残り残されてしまう。

知恵遅れの人達の施設とそれを取りまく周辺との関係を断片的に記してきたが成人施設の半数近くの人が居住地に於ては不適応だから施設入所へというケースがどんどん増えてきた。

それは入園後の警察の問い合せが増えたことでも分かる。住んでいた周辺で事件が発生すると〇〇がやったのではないかの推測が働くのだろう。次には目撃者が現われ警察のアリバイの問合せとなる。知恵遅れの人達の在宅に力を尽

すならもっともつと個々のケースに細かい配慮を行政が行なわねば、豊かな社会、即ち自分達の生活の邪魔になるものは速刻排除する物質追求の社会構成は恐ろしい型で自分自身に返ってきている。今日日本全体の行き詰りは即、居住社会の行き詰りとなり、学園内の行き詰り、家庭内の行き詰りとなってくる。許される範囲内でお互いが寛容になり対立をとかして行かねば、老と病が今迄の生活のツケを支払わせているように各人に待っている。老や病は自分で健康と思いつている人へも、障害者へも遅かれ早かれやってくる必然の問題だ。

地域へ拓かれた施設、施設の社会化……。

例の如く言葉が先に出て現実との間に繋りの薄い施設環境の中で竜雲学園は、法然寺境内の施設のすぐ横に十五年間施設の嘱託医をもらっていた精神科の医者に場所のみ提供して、クリニックを開業していただいた。まず第一にその医師が名医であることが根本であるがこのクリニックが学園と地域の奇麗ごとでない面で大きく結びついた。今迄の例でよくと周辺居住者は自分の隠された部分を表わすことを好まずクリニックを無視するかと思つたが先に例を

挙げた学園を無視し続けた知恵遅れを持つ家族の人々も利用するようになった。又、学園の入園者の家族もどんどん利用し本来施設長が、職員が、又々僧侶が受けねばならぬ悩みごと相談がクリニックの医師によってなされたことである。もっと驚いたことには学園の職員までがどんどんクリニックを利用し自分の精神状態のコントロールを受けるようになった。曰く家庭内暴力、登校拒否、夫婦間のいざこざ。個人の資質にもよろうが世間の信頼は、地域の信頼は社会の福祉の施設により、坊さんより医師の方が上という具体例を示している。

最後になったが学園の園生の最近の動きについて一〇二例を示すと、糸賀一雄先生によって「この子らを世の光に」と唱えられて二十年、田村一二先生によってその路線は「茗荷村見聞記」となつて知恵遅れの人々のユートピアを示されて十五年、金銭的に現在は恵まれているが学園環境から外へ出るための枝葉の部分が整理されずエネルギーのみ施設内に充満している。

一時は施設入所の対象者は重度者が主であり、この人達はずっとそのまゝ在園を続けている。そこへ最近の入所者

は自分の生家で、又、働いていたところで問題を起した人達がほとんどである。従つて能力的には高い。自分をコントロールするのに不得手な人々。IQにして上下幅七十からの差のある人々を限られた同一空間で処遇する施設で、今、最も注意し気を配るのは園生同士による園内暴力である。常習的にトラブルの多い人達で昨年からボースカウトのローバー隊を結成、約十人のメンバーが制服に身を固め公共の場や池の土手とか道路側の掃除を猛然とやりだした。手狭な学園内でのいざこざも方向さへつけければそのエネルギーを善用出来る。それに刺激されてローバー隊より年令的にもう一段上の人がシルバー隊を結成し立正校成会が主力の「明るい社会を作る会」明社運動の支部を学園内に結成、公園の空カン拾いに徹している。

園生個々の人々は学園所在地のプラスにはならない。マインナス要因を作るのは学園の方針や運営であり、又、個々の職員のモラルでありデリカシーである。これからも学園在園者の諸君に少なくとも迷惑をかけぬ園長であり続け、未来を見据えてやってゆきたい。未熟な私はやはりむづかしい福祉語や片假名を多く使ってしまった。

合 掌